

○目標・方針

中期的な学校運営の目標・方針	本年度の重点目標
「地域に誇りを持ち、生涯にわたって 学び続ける生徒の育成」 ～オール氷上で磨き合う学校 チーム氷上で支え合う学校～	(1) 生徒の確かな学力の育成 (2) 不登校生徒を出さない学校づくり (3) 教職員が生徒に向き合う環境づくり (4) 地域や保護者に信頼される開かれた学校づくり

○自己評価

領域	評価の観点	評価項目	達成状況	学校の取り組み状況と改善の方策
学校運営	保護者・地域住民との連携	生徒の様子や授業参観、懇談会、学校行事等の案内など、学校の教育活動の情報を学校だよりやHP等で保護者・地域へきめ細かく伝える。	A	学校便り、学年通信、学校行事の案内等を定期的に発行し、紙面及びHP等で学校の教育活動の情報を知らせることができた。保護者アンケートでは80%以上が肯定的な評価となっている。今後も継続して、子どもたちの様子を地域や保護者へ伝えていく。
		保護者・地域住民の方々にオープンスクールや授業参観、学校行事や講演会に参加していただき、地域に開かれた学校づくりを推進する。	A	感染症対策のため、オープンスクールや授業参観などは実施できなかったが、行事では学年やクラスごとに参観できるようにするなど、工夫して行うことができた。保護者アンケートでは、80%を超える肯定的な評価になっているが、参観日やオープンスクールを行ってほしいという希望は強い。今後もできることから工夫を検討する。
	生徒指導	人権感覚を磨き、いじめを許さず、自他共に「命」を大切にするための指導や活動を充実させる。 不登校生徒減少に向けての取組の推進と充実を図る。	B	いじめに関しては、いじめ防止基本方針のもと、組織的な対応に努めた。生徒会本部を中心に「君を守り隊」を編成し、見回りや「ありがとう運動」などの活動を行った。感染症対策のため、活動に制限はあるものの、自分たちでいじめをなくすという強い意識を持って活動している。不登校生徒は30人を超えるが、中には個人のペースで登校できるようになった生徒もいる。今後も個別の対応を必要とする生徒への支援を続けていく。
		学校のいろいろな活動の場面で生徒の達成感や充実感を大切に、主体的に活動できる生徒の育成を図る。	B	各学校行事では感染症対策に努めながらできることを模索し、工夫を凝らして実施することができた。その中で、生徒会活動や学級活動を通して、生徒自身が主体的に活動できる場面設定ができ、自分の役割を果たそうと努力する様子がみられた。部活動に関しては、前向きに取り組む生徒が多く、保護者アンケートでは83%の肯定的評価を得ている。一方で、安全面への配慮や指導体制についての意見もいただいた。引き続き、生徒が充実した活動ができるよう支援していく。
安全管理	交通事故の未然防止をはじめ、安全で安心な学校環境づくりを推進する。	B	定期的に学校施設の安全点検を行い、生徒が安心して学校生活を送れる環境づくりを進めている。今年度は8月の交通事故以降、登下校指導の強化、通学路点検と危険箇所の把握、交通安全教室の実施等、見直しを図った。保護者アンケートでは、施設・設備の安全管理では95%、交通安全対策では82%が肯定的評価であったが、どちらも昨年度から3ポイント減となっており、保護者や地域の、交通安全に対する意識の高まりがみられる。引き続き安全管理の推進に努めていく。	
教育課程	特別支援教育	特別支援教育の推進や支援の必要な生徒に対するきめ細かな教育の推進と充実を図る。	B	支援の必要な生徒たちへの共通理解は、昨年度とほぼ同様で肯定的に評価しており、今後も個別の指導計画やサポートファイルなどによる指導体制を確立していく。また、小中連携の推進と支援体制の構築では肯定的評価が82%であった。今年度は感染症対策に努めながら、小中交流会、授業参観、懇談を実施できた。コロナ禍の状況にもよるが、今後も継続していく。
	学習指導	基礎学力の定着と学力向上をめざして、家庭学習の充実や朝読書に取り組む。 授業内容の充実と改善を図り、全職員で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて課題に興味を持ちながら主体的に取り組む。	B C	生徒アンケートでは、家庭学習が1日1時間以上の生徒の割合が50%以上と、学習習慣が定着してきている。しかし、勉強の方法に悩んでいる生徒もみられる。更に、家庭学習の進め方について生徒同士が交流できる場を設定していく。また、1日2時間以上スマートフォンやタブレットを使用する生徒が46%を占めており、その使用について家庭との更なる連携が急務である。今年度も学級文庫の設置と、10分間の朝読書を実施した。今後も本と触れ合う機会の充実を図る。 「確かな学力の育成～ふりかえりを生かしたわかる・できる授業をつくる～」を研究テーマに、県教委指定「学習評価を通じた授業改善事業」2年次の取組を進めた。各学期、授業研究会や講師を招聘した研修会を行った。アンケートでは、「楽しくわかる授業」について、生徒・保護者の78%が肯定的回答をした。今後も、タブレット端末の活用を進め、「主体的・対話的で深い学び」が「わかる・できる」につながるよう研修を進めていく。
※領域（3領域） 学校運営、教育課程、課題教育 ※評価の観点例（網羅するのではなく、各学校で観点を絞る）				
		領域	観点例	
		学校運営	学校経営、組織運営、生徒指導、進路指導、教職員の育成、危機管理、安全管理、保護者・地域住民との連携、施設設備 等	
		教育課程	学習指導、道徳教育、総合的な学習の時間、指導方法の工夫改善 等	
		課題教育	特別支援教育、人権教育、福祉教育、情報教育、食育、防災教育、環境教育 等	
※達成状況 A：優れている B：おおむね良好 C：やや改善 D：要改善				

○学校関係者評価

自己評価の各観点に対する評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・思春期や成長期の子どもからすると、親に学校での様子を見てもらいたくない生徒もいるだろうが、大半の親は子どもがどんな生活を送っているか見たくなるものだと思う。参観日やオープンスクールが実施できる日が早く来れば期待する。</li> <li>・オープンスクールや参観日の実施は、保護者にとって期待感が高い。一方で、教職員にとっても見られることにより緊張感をもって授業づくりをすることにもつながるため、大事にしたい行事であると思う。</li> <li>・今後もコロナ禍にあったとしても、目的の再確認をされ、できることから進めていくスタイルの継続を期待したい。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校の問題は、単に「学校に来たらよい」ということではなく、個々の該当生徒と向き合う中で、個に応じた登校スタイル（別室登校や時差登校等）を決めて支援されていることに感謝する。</li> <li>・別室登校の在り方については注意が必要ではないか。他の生徒からすれば、単にわがままとらえられ、そのことに起因するいじめにも発展しかねない。該当生徒本人の思いをしっかり聴き、保護者とも十分に連携して進めていただきたい。</li> <li>・部活動については、働き方改革の面や体制づくり等、大変だとは思いますが、生徒が主体的に活動できる場面でもあるので、引き続き、ご支援をお願いしたい。</li> <li>・学校生活における生徒自らのルール・ビルドの実践を期待する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月の大きな事故を経験し、保護者や地域の安全意識や見る目は変わってきていると感じる。</li> <li>・保護者や地域の見守りの中では気をつけるようであっても、見守りがなければ注意散漫になるなら指導の工夫が必要と考える。</li> <li>・交通事故等の未然防止のためにも、自分事としてとらえさせ、自ら積極的に交通安全に努めようとする態度を培う指導に期待する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援学級での指導により、自ら進んで学習に向かおうとする態度が養われたとある保護者から聞いた。生徒が自ら主体性を持つことは素晴らしい。</li> <li>・特別支援学級についてもやり方を工夫しつつ、オープンスクールや参観日のような形で公開してほしい。「違いがあつて当たり前」となるのが理想。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、基礎・基本の定着とともに、学習に向かう態度や生徒自身の学習に対するマネジメント力の向上を図っていただきたい。</li> <li>・タブレットの活用で、単につながる手段としてや自学自習のためのツールとしてではなく、対話的な場面を授業に作り出せるような活用ができれば、不登校生徒個々への支援にもつながり、不登校そのものも解消できる可能性もあるのではと考える。</li> <li>・県教委指定「学習評価を通じた授業改善事業」の2年間の取組は今年度末で終了となるが、効果のあった点については来年度も継続させていただきたい。</li> <li>・達成状況における「C：やや改善」について改善する点はどんな所かを明確にしつつ計画につなげていただきたい。</li> </ul>
自己評価の実施方法についての評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後、教職員の意欲が高まるよう、来年度の教育活動の充実に向けて、良い方向でこのパワーアッププランを活用していただきたい。</li> <li>・「達成状況」においてのAやCの状況をどのようにとらえるのか、全ての教職員で共通認識を持つ必要があるのではないかと。達成状況の程度のとらえ方が違っていると、評価の違いにもつながる。</li> </ul>
学校関係者評価のまとめ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの研修の成果を生かしつつ、生徒の「確かな学力」の向上を図るため、工夫ある授業づくりに努めていただきたい。</li> <li>・不登校解消に向けた、個々の生徒と向き合う指導を組織的に展開していただきたい。</li> <li>・タブレット端末の活用については今後も工夫していく必要がある。</li> </ul>

学校関係者評価を受けての次年度の改善の方向性について

- ①生徒の「学力向上」に向けた、教員の「授業力向上」の観点  
(確かな学力の向上につなげるために、生徒の「主体的な学び」を引き出す授業づくりを工夫し進める。)
- ②不登校や不登校傾向の課題がある生徒に対する教職員の組織的指導体制の充実・強化の観点  
(生徒の「居場所づくり」のための、組織的かつ内面理解に基づく、人権基盤の生徒指導を推進する。)
- ③情報モラルの上に立つ、情報教育の推進とICT活用の観点  
(授業におけるタブレット端末の工夫ある活用の推進と情報モラル教育の推進を強化する。)

令和4年3月 日

学校名 丹波市立氷上中学校  
校長名 吉川景敏 印